恋姫×スクライド

午後の緑茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫×スクライド

【Ｎコード】
Ｎ５４７１Ｗ

【作者名】
午後の緑茶

【あらすじ】
恋姫とスクライドのクロスです。カズマのカッコ良さをうまく書ければいいなぁと思っています。ちなみにカズマはかなみに出会っていない設定です

プロローグ

？「ほらぁ～、二人とも早く早く～！」

どこか暖かく緩い雰囲気の桃色の髪をした少女が後ろにいる黒く美しい髪をした少女と、赤い髪の小さな少女を急かす

？？「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

？？？「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が二つも落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ」

二人はどんどん先に行く桃香という少女に危険だと注意する

？？「鈴々の言う通りです。もしやすると妖の類かもしれません。慎重に近付くべきです」

？「そうかなぁ～？・・・関雲長と張翼徳っていう、すっごい女の子たちがそういうなら、そうなのかもだけど・・・」

張飛「お姉ちゃん、鈴々たちを信じるのだ」

関羽「そうです。劉玄徳ともあろうお方が、真っ昼間から妖の類に襲われたとあっては、名折れというだけではすみません」

劉備「うーん・・・じゃあさ、みんなで一緒に行けば怖くないでしょ？だから早くいこ♪」

そう言って劉備はまた先に行ってしまった

張飛「はぁ～～～～～～、分かってないのだぁ～～～～」

関羽「全く。・・・鈴々。急ぐぞ」

張飛「了解なのだ」

三人は流星が落ちた方角に向かった

??「・・・ん?」

家の中のはずなのに乾いた風を肌に感じて眼が覚める

いつもと違う寝床の感触に違和感を感じ、周りを見渡すと一面の荒野が広がっていた

??「なんだ?外で寝ちまったのか俺・・・」

しかし周りに知っている場所がなく、寝ぼけたにしては規格外すぎる
すぐに自分の家の付近ではないことを理解した彼は服に付いた砂を
払いながら立ち上がり、
赤みがかった茶色い髪を手で掻きながら身の回りを確認する

??「なんもねぇし、なんも持ってねぇ・・・。これじゃあ誰とも
連絡とれ「なんじゃこりゃあああああ!!」・・・なんだぁ?」

へんな叫びを聞きつけて向かってみると白くて背の高い挙動不審の
男がいた

白い男「どこだここ??なんかのどっきりか!?」

あまり関わりたくなかったが人が彼しかいなかったため接触してみる

白い人「は!?まさか誘拐?でも俺「おい!お前!」・・・へ?」

驚いた顔でこっちを見ている白い男に希望は薄いが聞く

??「あんたここがどこだか分かるか?」

白い男「・・・わかりません」

やっぱりなとため息を吐いていると、おそらく同じ境遇の人だと感
じた白い男が尋ねる

白い男「あの・・・、君も気が付いたらここにいたの?」

??「ああ」

お互いの状況を確認し、とりあえず一人ではないことに少しほっとする白い男

白い男「俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の学生だ。君は？」

？？「・・・カズマだ」

これが後の天の御遣いと、天の拳の出会いであった

1話　『関雲長』

お互い同じ境遇だと分かった二人はまずこの辺りに詳しい人を探そうということになり、
荒野を歩いていたのだが・・・

カズマ「だぁ～から、ついてくんじゃねぇよ！！」

一刀「待てよ！！一人より絶対二人で行動した方がいいってば。っていうか一人にしないで！！」

実際はカズマが人を探すには手分けした方がいいと言ったが一人が不安な一刀は一緒に探そうと提案する。
しかしどんどん一人で行ってしまうカズマに一刀がついていってる状態だった

一刀「携帯も圏外だし、本当にどこの田舎だよ」

一刀は持っていた携帯電話を見るがアンテナ表示は無情にも1本だった

カズマ「お前向う探せよ！！」

一刀「いや。こういう時はあまり離れない方が・・・ん？」

その途中前方に目をやると服を黄色で統一した3人組が歩いて来た

カズマ「人だ。っておい！！」

一刀「人だ！やっぱり一緒に行動しててよかったな」

人を見つけたことに喜び、黄色い人達に近づいて行く一刀
しかし一刀は近づいてやっと気付いた

一刀「コスプレ？」

とりあえず東洋系の顔つきだが、格好は鎧というか何というか、外に着ていく格好ではない

アニキ「・・・はぁ？何言ってんだ、こいつ」

チビ「さぁ？あっしに聞かれても・・・」

アニキ「おメェ、分かるか？」

デブ「・・・わがんね」

リーダーの様なノッポの奴と、子分の様なチビとデブが一刀を変な眼で見る

一刀「あの、すいません・・・」

アニキ「何だよ」

一刀「ここ、どこですか？」

格好が変でもとりあえず現在地を聞いてみる

3人「・・・はぁ？」

3人は呆れたようにさらに変な眼で見る

一刀「僕達道に迷ってしまって困っているんです。もしよかったら、連絡か携帯充電させてもらえませんか？バッテリー切れちゃって・・・」

さすがに変な格好の人でも携帯くらい持っているだろうと思っていたが

チビ「アニキ。こいつ頭おかしいっすよ」

アニキ「俺も思った」

デブ「んだ」

なんだか反応がおかしい、言葉のキャッチボールが出来てない

一刀「あの、言葉通じてますよね？」

アニキ「それはこっちが聞きてえぜ。俺の言ってること分かるか？」

一刀「はい、分かりますけど・・・」

一刀は自分がちゃんと喋れていなかったのかと考えていたら冷たいものが頬に触れた

アニキ「なら、よかった・・・。ついでに金出してもらおうか？」

頬に触れたそれはコスプレ用のおもちゃではなく包丁より鋭利な刃物

一刀「はい？」

アニキ「言葉通じてるんだよな？なら、早く金出せよ。ついでにその光る服もな」

カズマ「てめぇら強盗か・・・」

チビ「へっ、今頃気づいたのかよ」

デブ「だな」

今まで事の成り行きを興味なさげに見ていたカズマが強盗と気付き近寄って来る

慌てて3人から離れてカズマの横に移動する一刀

一刀「や、やばいぞカズマ！あれ本物だ！！」

一刀は初めて向けられる凶器に焦る

カズマ「お前、闘えないならさがってろよ」

一刀「おい、カズマ！！」

一刀は危険だと言うがカズマは3人の前に立つ

アニキ「何だ。お前、これが怖くないのか？」

そう言って持っている刃物をカズマに向けて威嚇する

カズマ「はっ！んなもんでビビるわきゃねぇだろうが。」

カズマは右手を開いた状態で前に出して鋭い眼光で３人を睨む

カズマ「こいつらぶっ飛ばして人のいる所まで案内させればいいだろうが！！」

カズマは開いた手を人差し指、中指、薬指、小指を順番に折り。最後に親指を折って出来た拳を軋むほど握りしめる

カズマ「さぁ、案内してもらうぜ。人がい「まてええぇぇぇぇい！！！！！」・・・あぁん？」

殴りかかろうとした瞬間、遮るように勇ましい女の声が響いた

？？「丸腰の一般人に刃を向けるとわ！！貴様らに武人の心はないのか！！！！」

アニキ「なんだ、てめぇは！！」

突然現れた女に驚きながらも刃を向ける

？？「賊ごときに武人の心を問いても無駄か・・・。なら仕方ない、弱気者を苦しめる獣よ。

この関雲長が成敗してくれる！！！」

何もない荒野の透き通るような空の下で

青龍円月刀を構える関雲長と名乗る少女と

彼女の登場に動揺する3人組と一刀

そして、握った拳を向ける相手を盗られて不満そうなカズマがそこにいた・・・

2話　『出会い』（前書き）

カズマの性格ちょっと変えます。でないと一人でどっか行っちゃいそうなんで・・・

2話　『出会い』

黄色い3人組は関雲長と名乗る少女によって軽く倒され、尻尾を巻いて逃げていった

関羽「まったく・・・。怪我は無いか？」

一刀「えっと、うん。大丈夫だよ、助けてくれてありがとう」

カズマ「けッ」

危険が去ったことに安堵する一刀と、獲物を盗られたことに不満なカズマ
しかし一刀はまた戸惑っていた

一刀「（また、コスプレだ・・・）」

少女は緑を基調にした服を着ており、これもさっきの3人組同様ファッション誌では見かけないものだった

関羽「いや、怪我がなくてなによりだ。しかし、こんな場所で武器も持たずに不用心だぞ」

服装はコスプレだが関羽の闘う姿や武器を見てとりあえずここは日本ではないのでは？
そう考えた一刀は少女に尋ねる

一刀「いきなりで申し訳ないんだけど、ここどこだか教えてもらっていいかな？」

関羽「なにも知らないで歩いていたのか？・・・ここは幽州啄郡。五台山の麓だ」

一刀「？」

カズマ「？」

場所を聞いた2人は聞きなれない地名に首をかしげる
とりあえず自分達の知らない土地ということはわかった

？？「待ってよ～、愛紗ちゃ～ん」

えらく緩い雰囲気の声が聞こえ、目を向けると桃色の少女と赤髪の少女がこちらに走ってきた

？？「もう、いきなり走って行っちゃうんだもん」

？？「愛紗はよくお姉ちゃんをおいていくのだ」

関羽「あ、えっと、すみません桃香様。この2人が賊に襲われていましたので・・・」

3人は知り合いのようで、どうやら関雲長が2人を置き去りにしてしまったらしい

しかし一刀はそんな会話をよそに今の状況について考えていた

一刀「（ゆうしゅうたくぐん？そんな所学校の近くにない。それにあの子自分のこと関雲長って言ってたな・・・）」

聞いたことのない地名、聞いたことのある名前に一刀は軽く混乱してきた

カズマ「それよりお前らだれだ？」

些か失礼だがここでカズマが3人に訪ねた

一刀「あっ、自己紹介がまだだね。俺は北郷一刀、こっちがカズマだ。さっきは助けてくれてありがとう」

関羽？「姓が北、名が郷、字が一刀か？」

一刀「字？いや、姓が北郷で名前が一刀だ。字は無いよ」

聞き慣れない字という単語が出てきたが自分にはない

関羽「字が無い？珍しいな。私は姓が関、名が羽、字が雲長だ」

はい？

劉備「私は姓が劉、名が備で字が玄徳だよ」

はいい？

張飛「鈴々は張飛なのだ」

一刀「はいいいいいいいいいいいいいい！！！！！」

4人「わあああ？！」

あまりのビックネームに思わず叫ぶ一刀

カズマ「脅かすんじゃねえよ！！」

一刀「ごっ、ごめん・・・・」

３人の名前があの有名な三国志出てくるものであるから仕方ないきもするが・・・

一刀「（周りの風景やら関羽さんの暴れっぷりやゆうしゅうたくぐんなんかで怪しい所だとは思っていたけど・・・）」

４人が変な目で一刀を見る

一刀「あのぅ、質問していいかな？」

一刀「やっぱり・・・」

一刀は3人に今の世の中について確認した

一刀「(信じがたいがここは三国志の時代だ。しかも年数的に黄巾の乱より前。いや、もうその時期か?)」

カズマ「おい。自分だけ解ってないで俺にも教えろ」

一刀「あ、ああ。つまりな・・・」

一刀説明中・・・

カズマ「なるほど、タイムスリッパか・・・。なにいいいいいいいい!!!!」

一刀「タイムスリップな」

カズマに説明しているときに気づいたがどうやらカズマは三国志を知らないらしい

カズマ「おい。どういうことだよ!!」

一刀「俺にだってわかんないよ・・・」

ちょっと歩けば自分の知っている場所につくだろうと思っていたカズマは混乱した

一刀「とりあえずここの事を何も知らない俺たちが変に動いたらややこしくなるだろうからあの子達について行かないか？」

カズマ「ぐぬぬ・・・」

自分の知っている場所がどこにもない事に気づいたカズマは一刀の案に乗ることにした

劉備「あのね、次は私が質問していい？」

一刀「え！？あ、うん。どうぞ」

劉備「お兄さん達はどうしてこんなところにいたの？」

カズマ「気がついたらここだった」

一刀「同じく」

劉備「うーーーん。じゃあどこの出身？」

一刀「東京の浅草」

カズマ「ロストグラウンド」

2人「うん？」

ここで初めて2人はお互いの出身に違和感を持つ

一刀「外国？」

カズマ「浅草ってどこだよ？」

一刀はもしやと思いカズマに尋ねる

一刀「カズマの住んでた所って日本？」

カズマ「ん？そういえば昔そう呼ばれてたっぽいが今は違うぞ」

一刀「（昔？じゃあ俺と同じ時代の人じゃない？）」

カズマ「どうしたんだよ？」

一刀「多分カズマは俺の時代より未来の人間だと思うよ」

カズマ「なんでだよ？」

一刀「いや、俺が住んでた日本にロストグラウンドなんて所は無かったし、カズマ昔は日本って呼ばれてたって言ってたろ？」

俺はカズマとの会話に出た矛盾をのべた

カズマ「ふうん・・・」

一刀「あれ、あんまり驚かないな」

もっと驚くと思っていたけど意外だ・・・

カズマ「まあ、タイムなんとかしたらもう驚くもんねえだろ」

確かに

張飛「んにゃ～、どっちも聞いたことないのだ」

関羽「私もないな、どこの州だ？」

劉備「ねぇねぇお兄さん達。もしかしてこの国のことなんにも知らないの？」

劉備が何かを期待した瞳で見てきた

カズマ「知らん」

一刀「知らない・・・。いや、知識としては知っているけどその知識が俺の居る時代の遥か昔なんだ」

劉備「・・・？」

一刀「つまり俺達は今よりずっと先の未来から来たってこと」

もう頭がパンクしそうで俯いていると・・・

劉備「やっぱり思った通りだよ、愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

劉備が目をキラキラさせながら身を乗り出してきた

劉備「この国のこと全然知らないし、たまに変な言葉使うし、それにそれになんと言っても服が変！」

カズマ「なんだと！」

一刀「この時代だと変なんだよカズマ・・・」

言われるとちょっとへこむ・・・

劉備「この人達がきっと天の御使いさんと天の拳を持つ人だよ！」

関羽「管路の予言ですか・・・。あれはエセ占い師の戯言では？」

張飛「鈴々もそう思うのだ」

劉備「でも、東方より飛来する流星は、乱世を治める使者の乗り物だーって言ってたよ？」

関羽「確かに占い通りだとこのお方達が御使い様ということになりますが・・・」

鈴々「でもお兄ちゃん達なんか頼りなさそうなのだ」

関羽「英雄の覇気は感じられませんな」

劉備「そんなことないと思うけどなぁ」

３人にジロジロ見られて一刀達は居心地が悪そうだ

一刀「で、その天の御使いってなんだ？」

一刀は今まで疑問に思っていたことを口にした

関羽「この乱世に平和を誘う使者。・・・自称大陸一の占い師の言葉です」

カズマ「乱世？」

張飛「今の世の中のことなのだ。漢王朝が腐敗して弱い人達から沢山税金をとって、好き勝手してるのだ！それに盗賊もいっぱいいっぱいいて弱い人を苛めているのだ！」

劉備「そんな力の無い人達を守ろうって立ち上がったのが、私達３人なんだけど・・・。３人だけじゃなんにもできなくて・・・」

関羽「どうすればよいか方策を考えていたところでさっきの予言を聞いて・・・」

張飛「鈴々達はここに来たのだ」

一刀「それで御使いが居るであろう場所に俺達がいたと・・・」

丸っきりアニメや小説何かによくある設定である

一刀「だけど俺達はそんなすごい人じゃないよ？」

劉備「それでもあなた達がこの国の人じゃないっていうのは事実だよ！」

一刀「うーーーーん・・・」

自分達が天の御使いじゃないかという問題に悩んでいると・・・

ぐぅ～～～～～～～～～。

と、盛大に腹の虫が聞こえた

カズマから・・・

カズマ「もう無理・・・」

一刀「カズマ？」

カズマ「限界だ！腹減った・・・」

そういって項垂れるカズマ

一刀「そういえば俺も腹減ったな・・・」

張飛「鈴々もお腹減ったのだー！」

劉備「私達も朝ご飯食べてなかったね」

関羽「近くの街に移動しますか」

カズマ＆張飛「賛成・なのだー」

こうして5人は街に移動した

3話　『誓い』（前書き）

カズマの性格がうまくつかめてない気がします・・・

3話　『誓い』

～カズマｓｉｄｅ～

しっかしなんだかめんどくせえことになってきたな・・・
成り行きでこいつらについてきたけど早く元いた時代に帰りたいぜ

俺達は飯を食うため近くの街に来たが、本当にタイムなんとかしちまったんだな。
街並みや歩いてる奴の服装が俺の知らねえもんばっかりだ

張飛「お兄ちゃん達何やってるのだ？鈴々は腹ペコなんだから早くくるのだ！」

俺と・・・なんつたっけ？もう一人の白い奴が街並みに気を取られてたらさっき会った3人組のチビ助が遅いと文句言ってきやがった

張飛「お店はこっちなのだ！」

一刀「わっと！！！」

カズマ「お、おい！引っ張んな！！」

待ちきれないチビ助は俺達の腕を掴んで店に引きずって行った
そのまま俺達は店に入って食いもんの匂いを嗅いだ瞬間俺とチビ助の涎は止まらなかった

めんどくせえ事は今は無しだ！まずは飯だ飯！！

side out

一刀&カズマ「ふう～～～～～～」

なんて出された料理を平らげ、満腹吐息をついていた俺達に

劉備「それでね、北郷様。カズマ様」

劉備が姿勢を正して話しかけてきた

劉備「さっきも言った通り、私達は弱い人が傷ついて倒れていくのが我慢できなくて、少しでも力になれればと思って旅を続けていたの」

真剣な雰囲気になり、俺もカズマも話を聞く

劉備「でも・・・3人だけじゃもう、何もできない・・・そんな時代になってきてる」

関羽「官匪の横行、太守の暴政・・・弱い人間が苦しみ、力を持った者がそれを虐げる。今はそんな大陸になっている」

張飛「3人じゃ、もうなんにも出来ないのだ・・・」

劉備「でも、そんなことで挫けたくない。私達でもなにかできるはず。・・・だから御使い様！！」

一刀「は、はい！？」

劉備「私達に力を貸して下さい！！」

劉備はずいっと身を乗り出して頼み込んだ

劉備「天の御使いであるあなた達が力を貸してくだされば、もっともっともっと弱い人達を守れるって、そう思うんです」

劉備は真っ直ぐな瞳を興奮で少し潤ませながら、俺達の手を強く握り締める

そこから伝わるのはただ弱い人を守りたい・・・そんな優しいくて暖かい気持ちが俺の手にも伝わって来た気がする

一刀「だけど俺は天の御使いなんてすごい人じゃないよ？どこにでもいる学生だ・・・そんな俺が人を助けるなんて出来るのかな？」

人を助けるのは口で言うほど簡単なものじゃないと思う

関羽「あなたの言うことは正しいですが、正直あなた達が御使いでなくても良いのです」

カズマ「どういうことだ？」

一刀「御使いでなくてもいい？・・・なるほど、御使いかもしれないって風評か」

張飛「そうなのだ。鈴々たちは強いけど名声とか実績がないのだ」
関羽「私達は山賊退治などしていますがそれは一部の地域でしか評判がありません。」
劉備「誰かを救っても、違う場所で誰かが泣いている・・・もう私達だけじゃ限界が来てるんです」
確かに御使いという神輿があれば劉備達には大きな力になるだろう
天の御使いが傍にいれば劉備達の行動に世間は注目するようになる
多分俺がここに来た理由はこれなのかもな・・・彼女達に力を貸すために。
一刀「爺ちゃんが、『世に生を得るは事を成すにあり』って言ってたっけ・・・」
なら今目の前にいる劉備達こそ、その切っ掛けなのかもな
俺は深呼吸をしてーーーーーー
一刀「・・・分かった。俺でよければその神輿役、引き受けるよ」
劉備「本当ですか！！」
カズマ「お前本気か？」
一刀「カズマはどうする？今のところ帰る手段もないしもしかしたら世の中平和になったら帰れるかもしれないよ」

カズマ「・・・」

劉備「カズマ様・・・」

カズマ「俺は世の中が平和にとか、あんましピンとこねえが・・・
弱い奴らが強い奴のまえで泣く悔しさは分かる」

カズマは強く握った拳を見つめながら呟く

カズマ「だからお前らの気持ちも分かんなくはねえよ・・・」

関羽「では！！」

カズマ「帰る手段が見つかるまでは協力してやる」

一刀「それにご飯食べさせてくれた一飯之恩もあるしね」

カズマ「まあな・・・」

そう言って笑顔で劉備達を見ると・・・

劉備「一飯之恩？」

関羽「一飯之恩・・・ですか」

張飛「一飯之恩・・・」

一刀「ん？どうしたの皆」

3人は気まずそうな顔をして

劉備「えっと、天に住んでた人達だからお金持ちかなぁ、なんて思っていまして」

関羽「ご相伴にあずかろうかと・・・」

カズマ「おい、まさか・・・」

張飛「つまりお金持ってないのだ」

一刀「・・・え？」

この時、一瞬頭が真っ白になったのと店の女将が厨房から出て来たのは同時だったと思う・・・

劉備「はぁ～～～～～～、疲れたよぉ～～～～～～」

カズマ「なんで俺があんな事・・・」

俺達はあの後、無銭飲食を許してもらうかわりに店で皿洗いなどの手伝いをした。

正直疲れたが、話を聞いていたらしい店の女将が祝いの酒と、近辺を納めている公孫賛が義勇兵を集めているという情報をくれた

ちなみに公孫賛は劉備の学友らしい。そういうのは早く気付いて欲しいものだ

劉備「この辺りかなぁ～」

関羽「女将の話だとこの辺りのです」

張飛「きっと丘の向こうにあるんじゃないかなー？」

一刀「じゃあ、行ってみよう」

5人「おぉ～～～～～～！！」

眼下に広がるのは一面桃色の世界

劉備「これが桃園かぁ～～、すごいねぇ～～」

関羽「美しい・・・、まさに桃園に相応しい美しさです」

一刀「雅だなぁ～～～」

などと、3人でしばし風雅を楽しんでいると

張飛「さぁ酒なのだ～！！」

カズマ「おい。早く飲むぞ！！」

張飛が一刀の周りを走り回り、カズマが酒瓶を開けようとする

関羽「まったく、もう少しこの景色を楽しめばよいものを・・・」

劉備「あはは、じゃあ飲もっか」

一刀「よし、準備しよう」

手に持った盃に酒を注ぎながら、

一刀「それにしてもあの有名なシーンに同席できるとなんて・・・」

劉備「どうかしたの？ご主人様」

劉備達はこれから俺に仕えるかたちになるらしい

カズマでもいいじゃないかと言ったが、柄じゃないと断られた

だから一応俺がみんなのリーダーになった

これはおそらく俺が天の御使いでカズマが天の拳であろうという予

想でもある
天の拳についてはわかってないが俺は普通の一般人と自負しているためカズマが天の拳だろう

一刀「いや、なんでもないよ・・・ただこれからどうすればいいのかなぁって」

関羽「前を向いて一歩一歩、歩くしかないでしょうね」

張飛「立ち止まっても、物事は何も進展しやしないのだ」

一刀「・・・張飛の言う通りかもな」

張飛「そうそうなのだ！・・・それよりお兄ちゃん、カズマお兄ちゃん」

一刀「ん？」

張飛「お兄ちゃん達は鈴々達のご主人様になったんだから、ちゃんと真名で呼んで欲しいのだ」

カズマ「なんだそれ？」

関羽「我らの持つ、家族や親しい人にしか呼ぶことを許さない神聖な名です」

劉備「例え知っていてもその人に呼ぶことを許さないと口に出しちゃいけないんだよ」

張飛「だけどお兄ちゃん達には呼んで欲しいのだ」

一刀「（真名か・・・）」

それだけ期待してくれているんだろうな

関羽「我が名は愛紗」

張飛「鈴々は鈴々なのだ！」

劉備「私は桃香！」

一刀「愛紗、鈴々、桃香」

3人の真名を呟いていると、

カズマ「で、お前は？」

一刀「へ？最初に名乗ったよね？」

カズマ「・・・忘れた」

劉備「あはははは・・・」

絶対聞き流してたな・・・

カズマ「俺はカズマだ。それ以外無えよ」

一刀「俺は北郷一刀だ。一刀でいいよ」

カズマ「一刀か、オッケー刻んだ。」

そして彼女達を真っ直ぐ見つめ

一刀「今はまだ自分に何が出来るかわからないけど、みんなの力になれればと思うよ」

劉備「じゃあ結盟だね！」

そんな俺達を見ていた愛紗が持っていた盃を空に向かって高々と掲げた

関羽「我ら5人！」

劉備「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

張飛「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

関羽「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも」

桃香「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

一刀「・・・乾杯！」

この桃園の誓いから俺は『事』を成すため、戦国の世に踏み出した・・・

4話　『公孫賛』（前書き）

基本一刀視点です

4話　『公孫賛』

桃園の誓いの後、公孫賛の本拠地に向かい街で情報収集を行なった。
桃香の友人でも相手は街の太守、ズカズカ行っても門前払いだと思った俺たちは近くに居る賊のを討伐するという公孫賛に自分達でも義勇兵を集めてそれを提供することにした

と、言っても。兵隊を雇う金なんて俺達は全然持ってなかった・・・

なので正式に雇うのではなく、半日だけ兵隊の『フリ』をしてもらうことにした。
無い金は天の筆と称して俺が持っていたボールペンを愛紗に売ってもらったらかなり金額になったそうだ

そして数時間後には百人ほどの兵士（偽）が集まっていた

これなら公孫賛も目をつけてくれるだろうと、俺達は公孫賛の居る城へ向かった

一刀「ここまでは順調だな・・・」

百人ほどの兵士を連れて城に行った俺達は門前で少し待たされたが、下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された

公孫賛「桃香！久しぶりだなー！」

劉備「白蓮ちゃん、きゃーー！久しぶりだね！」

二人は再開を喜びながら話している

カズマ「で、まずどうするんだ？」

一刀「公孫賛には悪いけど俺達の評判を良くするために利用させてもらうよ。まずは愛紗と鈴々だけでも兵ではなく将として扱ってもらえるようにする」

俺とカズマが公孫賛に聞こえないように話していると、

公孫賛「桃香が言っているのはこの４人のことか？」

劉備「そうだよ。んとね、関雲長、張翼徳、それに官？お墨付きの天の御使い、北郷一刀さんと天の拳を持つカズマさん！」

公孫賛「官？？あの占い師か・・・、この辺じゃかなりの噂だ。眉唾ものだと思ってたけど」

劉備「そんなことないよ！２人共本物だよ！」

公孫賛「ふーーーん・・・」

頭からつま先までジロジロと見つめてくる公孫賛

カズマ「あんまジロジロ見んじゃねぇよ・・・」

劉備「あーーー、白蓮ちゃん信じてないでしょ？」

公孫賛「いや、桃香は嘘つかないし信じてるけど・・・」

公孫賛は顎に手を添えて

公孫賛「なんかそれっぽくないなぁと思って」

・・・ですよね

いきなりこの人達が天からきましたと言っても普通は信じない

劉備「私には二人の背後に後光が見えるよ！」

一刀「・・・ま、後光は別として、一応桃香達と行動を共にしているよ。宜しく」

公孫賛「そうか。桃香が真名を許したのだから一角の人物なのだろう。・・・ならば私のことも白蓮で良い。友の友なら、私にとっても友だからな」

屈託のない笑顔を見せる公孫賛、・・・いい人だなぁ。

一刀「北郷一刀だ。宜しく」

カズマ「カズマだ」

公孫賛「宜しく頼む」

挨拶を終えて話の本題に入る

どうやら白蓮には兵の偽装がバレていたようだ。さすがは一太守だなと感心して本当のこと告げると驚いていた

流石に全員が偽兵士だとは思わなかったようだ・・・

公孫賛「一人も居ないのか・・・？」

一刀「桃香と行動を共にしているのは俺とカズマ、関羽に張飛だけだよ」

公孫賛「関羽と張飛は後ろの二人のことか？」

関羽「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後、お見知りおきを」

張飛「鈴々は張飛なのだ！すっごく強いのだ！」

劉備「二人共すっごく強いんだよ！」

胸を張って二人のことを自慢する桃香

公孫賛「まあ、桃香の胸ぐらいの保証があるなら、それはそれで安心なんだけど・・・」

うーん、と唸りながら愛紗達を見つめていた公孫賛の後ろから、

??「その二人の力量を見抜けないのであれば、太守として些か不安ですぞ。伯珪殿？」

痺れ毒を含んだような言葉と共に、一人の美少女が現れた

公孫賛「むぅ・・・ならば趙雲はこの二人の力量がわかるのか？」

趙雲「当然。武を志す者として、その姿を見ればどれほどの人物か分かるいうもの」

公孫賛「へぇ～・・・まあ星が言うならそうなのかもな」

趙雲「ええ。・・・そうだろう？関羽殿」

関羽「そう言う貴女も腕が立つようだが？」

張飛「鈴々もそう見たのだ！」

趙雲「さて・・・どうなのでしょうな？」

余裕を感じさせる笑みを浮かべる趙雲

趙雲「（それと、もう一人・・・）」

チラリ、と話を聞いていないであろう、そっぽを向いているカズマに視線を向ける

趙雲「（武、とは言わないが・・・何か力を持っているような不思議な御仁だ・・・）」

ｓｉｄｅ　カズマ

何かこの時代はめんどくせえ事ばっかだな・・・

賊やら、太守やら、世の中平和にとか、俺の居た所はもっと自由だった気がするぜ

いや、そうでもねぇか・・・

ホーリーやら、ネイティブアルターやら、街のゴロツキとかいたな

今は関係ねぇか

それにしても我ながら変な奴らに協力しちまったな

あの頃は自分の周りだけよければいいと思っていたが・・・

世の中全部か、でけえ事考えてんな。嫌いじゃねぇ

俺としては占い師を探してぇんだが場所が分からねぇ・・・

そいつに聞けば帰る方法も分かるかもしんねぇが、ここに来ちまった理由も気になる

天の拳か・・・そういえば、誰かに期待されるなんてあんまし無かったな・・・

あいつ等三人は、俺と一刀に期待してる。

勝手に評価されんのは好きじゃねぇが、不思議と悪い気はしねぇな・・・

まぁ、帰る方法が見つかるまでは協力してやるよ

さて、小難しい話も終わったようだし、早く賊退治に行こうぜ

さっさと終わらして飯食って寝てぇんだよ、俺は・・・

5話　『拳』（前書き）

ご指摘を頂いたので追加補足いたします。前に表記したかなみと出会っていない設定ですが、これは時間軸はアニメ開始時のままで君島には出会っていますがかなみとは出会っていない・・・つまりもとからかなみ存在しない設定に勝手ながらさせて頂きました。作者のご都合主義で申し訳ありません

5話　『拳』

こうして俺達は公孫賛陣営に加えてもらうことになった

城門に呼ばれた俺達の目の前には武装した兵士達が整列している

千人単位の人間が集まる様子は壮観の一言だった

趙雲と愛紗達は自分達の志を語り合って意気投合したらしく、真名を交換していた

そんな風に会話を楽しんでいると陣割が決まった

関羽「我らは左翼の部隊を率いることになりました。新参者に左翼全部隊を任せるとは、なかなか豪毅ですな、白蓮殿も」

劉備「それだけ期待されているのかな？」

一刀「そうだろうね。・・・鈴々、頼むよ？」

張飛「任せろなのだ！」

ドン、と胸を叩いて自信満々な鈴々の頭を撫でていると軍の先頭にいた公孫賛が演説を終え、大地を揺るがす兵士の声を満足気に聞いていた公孫賛はいよいよ出陣の号令を出した

一刀「賊相手に初陣かぁ～・・・」

関羽「どうかされましたか？」

一刀「いや、俺のいたところは平和で戦争なんて遠い別の国でしか起こってなかったから正直怖くて・・・」

自分の振るえる手を見せながら、不安を吐露する

一刀「男の俺がこんなに怖がってちゃ、世話ないな・・・」

関羽「そんなことありません！戦いを怖がるのは、人として当然です」

劉備「そうだよ。戦いは人を傷つけること・・・本当はやっちゃいけないんだよ」

張飛「でも、鈴々達が怖がってたら弱い人達を守れないのだ」

関羽「だから勇気を振り絞り、暴虐と対峙するのです」

一刀「・・・強いな、三人とも」

三人は出会う前から山賊なんかと戦っていたんだから当然か・・・

あれ？

一刀「カズマは戦いが怖くないのか？」

ここで出陣の時から平然としているカズマに尋ねる

カズマ「んぁ？別に。・・・こんな多人数は初めてだが、俺ももといた場所じゃ戦ってたからな」

一刀「でも、人を傷つけるかもしれないんだぞ？」

カズマ「分かってるよ、んなこと。・・・けどな、俺の目の前に分厚い壁があって、それを突破しなければならないなら、俺は迷わずこの力を使う」

一刀「力？」

そう言ってカズマは右手の拳を握る

一刀「カズマ、それって・・・」

カズマ「お前もいつまでもビビってんじゃねぇぞ。戦うって決めたんだろ？」

カズマは強い視線を俺に向けた

カズマ「一度こうと決めたら、自分が選んだんなら決して迷うな。迷えばそれが他者に伝染する。選んだら進め、進み続けろ。」

一刀「カズマ・・・」

選んだら進めか・・・

そうだな、俺は桃香達と進むって決めたんだ

パシッ、と頬を叩いて弱気になっていた自分に気合を入れる

一刀「よし！みんな頼りにしてるよ！」

三人「「「おーーー！」」」

俺が決意を新たにしていると、

兵士「全軍停止！これより我々ほ鶴翼の陣を敷く！」

本陣からの伝令が命令を告げて去って行った

関羽「いよいよですね・・」

一刀「ああ。兵隊の指揮は愛紗、鈴々、任せたよ」

張飛「合点なのだ！」

関羽「桃香様はご主人様とカズマ殿と共に」

劉備「うん。二人とも気を付けてね」

関羽「御意。では！」

ペコ、とお辞儀した愛紗が部隊に号令をかける

兵士が抜刀すると同時に賊が突出して来た

張飛「それじゃあ、鈴々に続くのだ！」

関羽「全軍、突撃ーーーーーーー！！！！」

号令と共に突撃していく愛紗達、兵数は相手の方が勝っていたが愛紗と鈴々に次々と打ち倒されていく賊

戦は完全にこちらが優勢だった

カズマ「なんで俺は待機なんだよ・・・」

劉備「まぁまぁ、ここは愛紗ちゃんと鈴々ちゃんに任せよう？」

一刀「ああ、それにこっちが優勢みたいだし無理に出ることないよ」

カズマ「けっ」

戦えなくてカズマは不満そうだ

しかし、カズマってそんなに強いのか？

元いた時代じゃ戦ってたらしいけど武器も持ってないし・・・

愛紗「よし、敵は総崩れだ！今こそ我らの力を見せるとき！」

張飛「みんな鈴々に続くのだ！」

こちらの勢いに飲まれて撤退していく賊

劉備「あ！敵が逃げていくよ」

一刀「ああ、これで・・・」

これで終わる。そう思っていたら・・・

兵士「で、伝令！！！」

慌てた様子で兵士が走って来た

兵士「左舷中央から敵！伏兵その数五百！！」

一刀「え？」

伏兵？・・・まずい、愛紗と鈴々は賊の追撃で離れている

ここにも兵士は残っているけど将がいない

劉備「ど、どうしよう！ご主人様！」

一刀「くっ、せめて愛紗達に合流できれば・・・」

対抗できる兵数はいるが兵を率いたことのない俺と桃香は焦る

くそ！どうすれば・・・

カズマ「へっ、やっと出番か？」

一刀「なっ！？カズマ」

カズマは肩を回しながら迫る賊の方へ歩いて行く

一刀「待てカズマ！一人じゃ危ない！」

カズマ「こんなところで大人しくしてるなんて、御免だね」

振り返るカズマの顔に不安は無い、むしろ強い意思を感じる

一刀「でも一人でどうするんだ！？武器も持たないで・・・」

カズマ「武器ならある」

カズマは右拳を軽く掲げると、

カズマ「お前等はそこで待ってろ！見してやるよ・・・俺の自慢の拳をな」

賊「はっはっはっは！行けーーー！」

賊「あいつ等全員ぶっ殺せ！！」

部隊長「やつらも賊が伏兵を使うなんて思うまい。・・・ん？」

自分達の策に酔っている賊達の目の前に一人の変な服を着た男が歩いて来た

部隊長「なんだぁ？お前」

カズマ「あんたが部隊の頭か？」

そいつは自分達を前に怯えることもなく不敵な笑みを浮かべながら立っていた

不振に思い、部隊を停止させた

部隊長「何かようか？小僧」

剣を向けて威嚇すると後ろにいた奴らもニヤニヤ笑いながら近寄って来た

カズマ「お前らをぶっ飛ばしに来た」

何言ってんだこいつ？

一瞬間が空いて言葉の意味を理解した時には笑いが出た

部隊長「だはははは！！一人で何が出来んだよ」

他の連中も笑う

カズマ「てめえ等なんか一人で十分だ」

部隊長「武器も持たないで何言ってんだよ！？だはははは！！！」

カズマ「なははははは！！」

気に食わなかった。自分達を目の前にして平然としているそいつが

部隊長「てめえが笑ってんじゃねぇ！！！！！」

そいつに近づいて剣を振り下ろした

一刀「カズマ！！！」

劉備「カズマさん！！！」

カズマ「へっ」

カズマはそれを右に体を半身にすることで避け、剣を持っている賊の腕を右手で掴んだ

部隊長「な！？離せ！！」

そう言って空いている左手で殴ろうとした時、顔面に痛みが走った

カズマは賊が振りかぶった瞬間手を離して左のストレートを放った

もろにそれを受けた賊は仲間の方へ飛んで行き、鼻から大量の血を流しながらカズマを睨んだ

部隊長「てぇ、てぇみぇ・・・」

辛うじて立った賊は鼻血を乱暴に手で吹きながら

部隊長「ぶっ殺す！！！」

カズマ「おお、怖ぇ怖ぇ。・・・だけど先に喧嘩売ってきたのはそっちだぜ？」

賊「喧嘩？何言ってんだ。こいつは殺し合いだ！！！」

カズマ「俺にとっては喧嘩だ。お前等が売った！俺等が買った！・・・・それだけだ」

一刀「カズマ下がれ！殺されるぞ！」

後ろからカズマを追いかけてきた一刀が叫ぶ

カズマ「見てろって言ったろ？それに天の拳だなんだ言われてなんにもしねぇのはおかしいだろ」

カズマは体制を低くしし、左腕をダラリと下げ、右腕を賊の方に向けた

カズマ「見してやるよ。俺の自慢の拳をな・・・」

右手の人差し指、中指、薬指、小指、最後に親指を閉じて軋むほど拳を握り締めた

するとカズマの体が光に覆われ、地面に数箇所穴が空いた

部隊長「なんだこりゃあああ！？」

地面は粒子となってカズマの右腕に集まっていく

髪の毛は逆立ち

背中には三つの赤い羽のようなものが生えて

腕は太陽を思わせる黄金の装甲に包まれ

拳は炎を感じさせる手甲に覆われていた

一刀「カズマ・・・？」

劉備「わぁ・・・」

これがカズマの言っていた力？

一刀はカズマに戦の前に感じた頼もしさの招待を知った

賊「なんだ？あれ・・・」

部隊長「い、いきなり地面が・・・」

地面がえぐれたり、カズマの腕に突然武装が出来たことに驚く賊

カズマ「おい！一刀！」

一刀「え！？な、何？」

カズマ「俺達の評判を高めるにはド派手にやった方がいいんだよな

？」

一刀は感じた、カズマなら一人でも賊達を倒せると、

一刀「ああ、派手にやってくれ！」

カズマ「へっ、あいよ！！！！」

ドゥン！！！！！

カズマは右手で地面を殴り、人が殴ったとは到底思えない音を出し、その衝撃で賊達の頭上へと飛んだ

一刀「な！！！」

劉備「えぇ～～～～～～！？」

一刀と桃香はその高さに驚き、賊は口を開けて呆然としていた

カズマ「悪いが、手加減はしねぇ。最初から本気だ！！」

カズマの右腕の装甲が開き、力いっぱい拳を握る

背中の羽の一つが砕けて、そこから光が吹き出し、カズマは賊に向かって勢い良く降下していった

ここから世の中は大きく動く

その始まりの地に

カズマ「衝撃のぉ・・・」

流星が落ちた

カズマ「ファーストブリットォォォ！！」

5話　『拳』（後書き）

やっとカズマの戦闘シーンが書けました。でも皆さんこんなんで良かったんでしょうか？感想快くお待ちしています

6話　『道』（前書き）

鈴々って動かしやすいですねー

6話　『道』

一瞬だった・・・

カズマが放った拳は勢い良く賊達に突き刺さり、爆発音と共に巨大な土煙を上げた

土煙が晴れるとそこには衝撃で倒れている者、腰を抜かしている者、または目の前の出来事について行けずに呆然と立ち尽くしている奴もいた

かく言う俺と桃香もその一員で、口をポカーンと開けて地面から拳を離すカズマの後ろ姿を見ていた

仕方ないさ、誰がこの状況を見て口を開けずにいられるか

だって、そこには直径１０ｍほどのクレーターが出来ていた・・・

一刀「・・・・・」

劉備「・・・・・」

確かにド派手にやって下さいと言いましたが、これは予想外ですカズマさん・・・

残った賊をクレーターの中から睨んだカズマは、

カズマ「さあ、挨拶は終わりだ。掛かってこい！！！」

そう言って右の拳を握りながらまた戦闘体制に入る

しかし賊は・・・

それと同時に・・・

情けない叫び声を上げながら逃げていった

それを見たカズマは今俺達と同じ、口を開けて呆然とした顔をして
その賊の逃げっぷりを見ていた

目の前から賊が居なくなると、
カズマの叫びが青い空に響いた

カズマ「逃げてんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!!!」

こうして

カズマと、愛紗や鈴々、そして星の活躍もあって公孫賛軍は完全勝利を得た

白蓮や星と合流し、意気揚々と引き上げる中、カズマはずっと不満そうな顔をしていた

やっと力が振るえると思ったら、敵は脱兎の如く逃げた

つまり不完全燃焼だ・・・

あの後、鈴々は勝って上機嫌だったが愛紗は申し訳なさそうな顔だった

カズマが撃退してくれたとはいえ、自分の仕える主君に敵の接近を許したのだから無理もないか

でも、無事だったし愛紗は悪くないよ、と言ったがまだ納得していないようだ

後で桃香にフォローしといて貰おう

大勝利で初陣を飾った俺達は、城の一角に部屋を与えられ、白蓮の下に留まっていた

こうしている間にも賊討伐は続き、今では愛紗と鈴々の武名を知らない者は居なくなった

一方カズマはというと、あまり前線には出なくなった

最初は自ら前線に出ていたが、『力』を使う度に賊が逃げるので実際作戦効率は悪くなった

なのでカズマは俺と桃香の護衛が主な役割になっていた

そんな俺は最近大陸の様子がどこかおかしいことに気がついた

賊の横暴、大飢饉、疫病、人の心には不安の文字しか浮かばなかった

そしてついに民衆の不満が爆発し、民間宗教の指導者に率いられ官庁を襲う事件が起きた

暴動は官軍によって鎮圧されるかと思ったが、反撃を受けた官軍が全滅

それをきっかけに暴徒達は周辺の街に侵攻し始めた

それは破竹の勢いで、今では大陸の三分の一が暴徒に乗っ取られ、世は動乱の時を迎えた

これに漢王朝は焦り、官軍は頼りにならないと判断し

地方軍閥に討伐を命じたのは、昨日の話だ

漢王朝の命が来た時、ここから本当の戦いが始まる

そう思った・・・

一刀「ごめん、遅くなった」

侍女に連れられてやって来た玉座の間には、白蓮の他に星や、桃香と愛紗がいた

一刀「あれ、鈴々とカズマは？」

関羽「鈴々は今カズマ殿を呼びに行っています」

しばらくすると元気な声で走ってくる鈴々と、

張飛「お～～～い、お姉ちゃ～～～ん！！！」

カズマ「のわぁぁぁぁぁ！！！！」

鈴々に腕を掴まれ、引き摺られながら叫ぶカズマがやって来た

張飛「ほい！！！」

カズマ「ぐへ！！！！！！」

鈴々は俺達の目の前にカズマを放り投げると、カズマは潰れたカエルのような声を出して床を滑った

張飛「カズマお兄ちゃん連れてきたのだ！」

劉備「え、えっと、ご苦労さま～」

桃香は予想してなかった連れて来る方法に苦笑いで褒めていた

カズマ「・・・・・・・・・・・・」

一刀「カ、カズマ・・・？」

カズマ「だあああああああ！！！！」

カズマは勢い良く飛び起きた、無事のようだな

カズマ「何しやがんだ！チビ助！」

張飛「にゃ？カズマお兄ちゃん呼びに行った時眠たそうだったから鈴々が連れてきてあげたのだ！！」

にっ、と無邪気な笑顔で答える鈴々

カズマ「あのな！俺だって呼ばれれば自分で行くわ！！」

関羽「まあ、まあ」

カズマを宥める愛紗、そこへ白蓮がオズオズと話しかけて来た

公孫賛「え、えっと、休んでるところすまんな。呼び出したりして」

一刀「構わないよ。それより、何かあったの？」

公孫賛「・・・北郷も朝廷より、使者が来たのは知っているな？」

一刀「ああ、黄巾党を討伐しろって言うやつだろ？」

そう答えると、白蓮は真剣な顔に戻り、話を始めた

公孫賛「そうだ。私は既に参戦することに決めたんだが・・・」

劉備「白蓮ちゃんが、これは私達にとって好機じゃないかって」

一刀「好機？何の？」

関羽「我等が独立する好機ということです」

公孫賛「黄巾党鎮圧で手柄を立てれば、朝廷より恩賞を得るだろう。桃香達がその気になれば、それなりの地位にもつけると思う。そうすれば、もっと多くの人達を守れるだろう？」

白蓮は少し困ったような顔で、

公孫賛「残念ながら、今の私にそんな力は無い。この動乱を収めた

いと思ってはいるが・・・、すぐにはむりだ。そんな私に桃香達を付き合わせるのも悪い。時は金より貴重だからな」

一刀「ふむ・・・」

白蓮の言葉には一部の真理があるのだろう。だがそれだけとは思えなかった

白蓮はおそらく俺達の扱いに困っているのだろう

客将としてはすでに星がいる。それに最近名が上がってきた桃香達がいたら、それは太守として面白くないだろう

一つのグループにリーダーより名声のある人物はいらない。だから、手柄を立てさせてさっさと独立させるのが無難だ

まあ、人の良い白蓮のことだから、そこまで意地悪く考えていないだろうけど・・・

なら、今までの休む場所とチャンスをくれた白蓮には感謝の念が絶えない

一刀「・・・そうだな。俺達もそろそろ自分達で頑張ってみるか」

張飛「でも、鈴々達だけで大丈夫かな？」

一刀「それでも、いつまでも白蓮に頼りっぱなしじゃまずいだろ？」

関羽「そうですね。しかし、私達には手勢というものがない・・・それが不安ですね」

俺達がこれからについて考えが浮かばず、悩んでいると・・・

趙雲「手勢なら街で集めれば良い。な、伯珪殿？」

案を出したのは星だった

公孫賛「お、おいおい！私だって討伐隊を編成するために兵を集めるんだからそんなの許せるはず・・・」

超雲「伯珪殿、今こそ器量の見せ所ですぞ」

公孫賛「うっ・・・」

顔が引きつっている白蓮に星が悪戯っぽい笑みを浮かべて、

趙雲「それに伯珪殿の軍は皆勇猛ではありませんか。義勇兵の五百や千、友の門出に贈ってやればよいのです」

公孫賛「む、無茶言うなよ・・・」

趙雲「私も勇を奮って働きましょう。・・・どうです、伯珪殿？」

公孫賛「むぅ～。あ、あまり多く集めないでくれると助かる・・・」

渋々といった感じで了承した白蓮に思わず苦笑が漏れそうになる

カズマ「お前いい奴だな・・・」

一刀「じゃあ遠慮なく集めさせてもらうよ。桃香、愛紗。手配を頼んでいいかな？」

劉備「まっかせーなさーい！」

関羽「御意。直ちに準備します」

二人は徴兵の準備に取り掛かった

公孫賛「はぁ・・・、こうなったら私も出来る限りの協力はするよ・・・」

一刀「はは、ありがと。この恩はいつか必ず返すよ」

公孫賛「ああ、よろしく。・・・星、武具と兵糧の供出するよう、兵站部に手配してくれ」

趙雲「了解した。さ、北郷殿参ろうか」

張飛「鈴々も行くー！カズマお兄ちゃんも行こー！」

カズマ「分かったから引っ張んじゃねぇ！！」

鈴々と、また引き摺られそうなカズマと一緒に兵站部へ向かった

その途中・・・

一刀「そういえば、さっきはありがとう」

俺は前を歩く星に話し掛けた

趙雲「別段。礼を言われるようなことはしておりませぬよ」

一刀「けど、白蓮を上手く乗せて・・・俺達に便宜を図ってくれたじゃないか」

趙雲「ふふ、なんのことやら・・・。それより北郷殿。討伐に際して、何か策のようなものはお有りか？」

悪戯っぽい笑みをした後、一転して真剣な表情で訪ねてきた

一刀「実は特に無かったりするんだよな・・・鈴々は何かある？」

張飛「鈴々は敵をやっつけるだけなのだ！！」

予想通りの答えだな・・・

一刀「カズマは？」

カズマ「カズマは敵をやっつけるだけなのだ」

張飛「ああ～！！鈴々の真似するな～！！」

二人はそう言ってじゃれていた

一刀「まあ」、集まる義勇兵の数にもよるかな？敵の情報も不足してるし、それらを集めてから本格的に行動開始だな」

超雲「なるほど。しかしあまり悠長なことをしていては、功名の場を失うのでは？」

一刀「最初の一歩は慎重な方がいい。俺達が軍勢を率いても弱小勢力に過ぎない・・・功を焦って全滅したら元も子もないだろ？」

趙雲「ふむ。・・・なかなか良くお考えだ」

俺を信頼してくれてる人達のためにもここで失敗するわけにはいかない

一刀「ところでさ・・・趙雲」

趙雲「星でよろしい。私はあなたを気に入っておりますゆえ。それに・・・」

星は鈴々をからかっているカズマに目を向ける。その目は面白い物を見つけた様な目だった

俺達の初陣でのカズマの武勇伝は瞬く間に広がった。

天の拳を持つカズマが賊を一撃で倒したと・・・

それから星はカズマにも興味を持ったようだ。

カズマの拳、カズマはあれを『アルター』って言っていた

カズマのいた所ではその不思議な力をもった『アルター使い』が複数いたようだ

能力を発動させる時、周りの物を分解して『アルター』を出すようだが、本人にもそれ以上のことは詳しく知らないらしい

一刀「分かった・・。なら、星。星は白蓮の家臣になるつもりはないのか？客将ってことは、正式な家臣じゃないんだろ？」

趙雲「ええ。客将とはあくまで客分。好意によって力を貸しているにすぎませぬ」

一刀「じゃあ、いつか星もここを出るのか？」

趙雲「さて、・・・自分でも分らないのですよ。ここに留まるか、はたまた徳高き主を探すのか」

本人もまだこの世をどう渡ろうか決めかねているようだ

一刀「そっか。・・・なぁ、星。もし、もしだよ？白蓮の所を出ることがあれば、俺達の所へ来てくれないか？」

趙雲「ふむ。・・・それもまた道かもしれないが。すまんが、自分の道は自分で選びたいのだよ」

一刀「そっか。・・・ごめんな。変なこと聞いて」

ふられたか・・・星は絶対桃香の力になってくれそうなんだけど

趙雲「いや。本音を言えば、誘って頂いて嬉しいですが。伯珪殿には恩がありますゆえ。まあ、それを返した後は北郷殿の道と私の道が交錯するやもしれませんな」

一刀「・・・俺はそう信じているよ」

趙雲「ふふ、私もそう信じておこう。ところで・・・」

そう言って星は俺達が歩いていた通路の外、中庭を指さした

するとそこには、鈴々をからかい過ぎたあげく
戦闘になりそうなカズマと鈴々がいた
趙雲「あれは止めなくてよろしいので？」
俺は中庭へ走り出した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5471w/

恋姫×スクライド

2011年11月17日00時20分発行